国境越え忘れえぬ人

―今、何処に、あの戦場の中国兵たち―

元山俊美
本町三丁目

フライパン鍋の中での中国将兵との心の触れ合い

私はこのほど、私の過ぎし日の激戦地、中国湖南（こなん）を訪れ感慨無量であった。列車の上で車窓に映るのどかな平和風景に魅せられ、この平和郷に砲弾の雨を降らせた罪の深さをいまさらに痛感し、平和の尊さを噛みしめるのであった。現地にきてつくづく重く感じるのは、この地で亡くなった多くの友のことである。そしてこの地から、よくも生きて帰れたという実感であった。

また、私は戦場で中国兵の捕虜と起居を共にし、立場が代わって逆に私が敗戦国の兵として捕虜の身となった。そうしたなかで私は、否応なしに「一体、敵とは誰で、それが悪い人で、殺し合いをしなくてはならないほど憎い人であったのか」を考えざるを得なくなった。ところがそれが良き隣人、良き友人であることを知ったとき、では誰がこの友人を憎い敵に仕立てて私にそう思いこませたのか、当然その正体なるものを考えるようになった。

私の中国兵捕虜との出会いは昭和十九年（一九四四年）八月の中旬、ところは中国湖南省、西衡陽（こうよう）駅の構内であった（双方併せて百万人規模、四二日間に亙る地獄の衡陽戦は壊滅的打撃を受けながら、一応日本軍の勝利で終り、中国兵約二万人が日本軍の捕虜となった。その捕虜百人足らずが配属され、私にその監視役がまわってきたのである）。中国語の対話などできない私はほんとに驚いた。でも筆談でもいける。あとは人間的心の問題だと腹に決めた。

崩れ落ちた貨物倉庫のテントの中で、大勢の仲間に囲まれている「南」という少佐と早速対談をはじめる。私は儀礼を尽くし、戦闘の大変だったこと、まず健康と命をこれからは大事にしよう、そのためお互いの責任は同じであると話す。そして、①人員的には私の方が絶対少数だから、何時踏み倒してでも逃げられる。しかし次の警戒線では大変な犠牲者が出る。ここまで生きてきて冒険しないでほしい。②食料事情は大変よくない。私の任務は監視ではなく食料確保の方が大事だ。食料はわれわ

れと貴方たちの合計人数の均等割りで分配し独占しないと伝える。

これは私の希望、決意以外なにものでもなかった。とにかく生きるために力を合わせよう。そして「運否天賦」と書いて掲げ、「いつ立場がかわるかも知れないのだから、私も実は一日でも早くここから逃げ、故郷へ帰りたい」など、正に手まね足まね。そのうち段々と緊張がほぐれ、向こうからも筆談が出るまでになった。幸か不幸か私は三日間でこの任務を解かれた。その間に逃亡した者はいなかった。しかし、その後大半の捕虜は逃亡、最後までいた者は僅かであったようだ。だがその間、鉄道の貨車の手押しや鉄橋などの作業中に、米空軍の銃爆撃を受けて死亡した者も少なくなく、またB29爆撃機の大編隊による絨毯爆撃にもたびたび悩まされたが、その際にも彼等はなぜか我々のように急いで退避しなかった。彼等の頭にはそれが味方の飛行機という観念があるのか、それとも生への希望を失っているためか。それを思うとやるせなかった。しかし現実的には、彼も我も、その好むと好まざるとに拘わらず「戦場」という逃げ場なきフライパン鍋に投げ込まれていたのである。

両親人質に、危険を冒させた文明舗の若者

私は昭和二〇年の一月、衡陽から百四十一キロ、桂林との中間にある冷水灘で、零陵との間を帆船民船団を指揮して水路輸送に当たっていた。絶えず飛行機の襲撃を受け、船頭たちとは生死を共にする仲であった。そこへ数名の捕虜が配属されてきた。私たちは彼等に、弁慶とか牛若などの名前を付け、行動を共にした。彼らは気くばりが良く、何かと助けられた。土地勘、民族勘のある彼等に危ないところを助けられたこともある。私と船頭と彼等の間の信頼感も高まって、お互いに頼みになる存在になっていった。

ところが四月五日、湖南省祁陽県文明舗に遣らされ、軍の糧秣（人馬の食料）調達の任務についた。ここは鉄道沿線から二〇キロ余り離れ「陸の孤島」と皆から嫌がられた所で、軍事状況は最悪、正規軍の攻撃を受けたら全滅間違いなしであった。私がこんな所に遣られたのは、それより半月くらい前のことであった。私が「もう忠義とか国のためというより、まず生きることを考えよう」と言ったことが隊長の耳に入っていた。そして、次は前記民船団の船頭に、たまたま輸送中の岩塩を飯盒で一杯分与えたことが、軍需品横領、処罰問題だとの指摘を受けた。勿論私はこれに抵抗していた。理由はこれである。

その文明舗では散発的な襲撃は度々であった。しかし七月五日、ついに重装備の中国正規軍五百名以上に包囲された。われわれは軽装備の僅か三〇余名、昼夜間断なき攻撃に犠牲者が出る。退路も遮断され、救援の伝令を出そうにも少数では途中でやられる。絶体絶命、動きがとれない。万策尽きて、近くの住民の老父母数人を人質にとって懸賞金を掲げ、その若者を誘い

出すことにした。そして伝令文を「こより」にして着衣に忍ばせ、三人を三つのルートに指定し、万一の場合は自分の命のため捨ててもよいから、いずれにしても必ず帰って来いと念押しして隠密伝令を出した。十三時間後の夜、持ち帰った返信は「現地を死守せよ。援軍の要なし」であった。しかし私は、これでよしという心境になった。腹が決まって気がつき、そして、すまんと思ったのは、眼の前の若者がわれわれ日本軍に協力することは、現にわれわれを攻撃している中国軍を裏切ることである。しかもそのために中国軍の包囲網を突破するという、二重三重の裏切りと危険を私は冒させたということであった。親を思う一心とは言え、大変な覚悟と決心の要ることである。私の頭の中は、お詫びと感動が入り交じった。私は複雑な思いで、直に若者に約束どおりの賞金を渡し人質を解放した。

その二時間後、二〇名の援軍が到着。撤退援護のためであった。これも実は開けて通したのであった。しかしそれが配置に就く暇もなく中国軍の猛攻撃が始まった。弾足（たまあし）の鋭さが違う。歩兵の分隊長が戦死者の小指に無残にも銃剣をあてがい、銃の台尻を打ち下ろし切断、油紙に包んで腰の袋に入れる。かくして七月七日午後三時、数をたのみに白昼一斉突撃に移って来た。勝負は歴然、その瞬間、私の周囲にいる者に「各個に、もの陰を利用し三百メートル後方の丘まで後退する」と叫んで、一段と低い陣地下のくぼ地に三段飛びのように飛びこんで身を伏せた。見ると、もう本陣地の銃座から中国兵が私たちを狙っていた。だが一発も追い撃ちはして来なかった。「無駄なこと」との指揮官命令だったのであろうか。

こうして私たちは脱出することができた。だが犠牲者がでた。私も負傷していた。しかし、私の現在あるのは、実に前述の危険を冒しての若者たちのお陰である。健在を祈りつつ、心からのお詫びとお礼を述べる。

忘れ得ぬ中国兵の友情

その後私は、また冷水灘の本隊に帰還し、本来の鉄道隊の任務に就く。私が敗戦を知ったのは、昭和二〇年（一九四五年）八月十八日であった。前線からと思われる馬上姿の参謀が私の前に来て「日本は敗けたんだ。もう兵器資材は要らん。食料を持て。食えるものは捨てるな。いいか、全部持って行くのだぞ。俺は広集団の参謀だ。隊長に伝えろ！遅いぞ、急げ！」。泥だらけの軍服、肉落ちした肩からの参謀肩章に私は悪戦苦闘の将の苦汁をみた。そして彼方の山の稜線を見ると、中国軍らしき部隊の隊列の動きがそこにあった。もう、それっ！であった。お手の物の専用軌道車に食料一切を積み込んで衡陽へ突っ走った。

そして、これも運命的な出会いというか、八月二〇日、すでに衡陽の連隊本部に集合していた捕虜監視ということになる。もう会えないと思った弁慶たちの顔がそこにあった。肩を抱いた。そして夜半のことであった。連隊副官・市川大尉（千葉県

在住）から、明朝捕虜を釈放してよいと命令を受けた。私は直ぐその事を弁慶たちに伝える。そうしたら彼は「自分たちがここを出たら、後ろから撃てと言われているのではないか。正直に言ってほしい」と言う。私は「何を言うか。私がそんな嘘を言う人間と思うのか。仮にそのような命令があったとしても、私はお前たちを絶対に撃たない。俺を信用できないならこの銃をやるから、今持って出て行ってよい」と渡そうとした。彼等は納得したようだった。私はさらに続けた。「明朝明るくなると都合が悪いと思うなら何時でもよい。今からもう自由だ」と伝える。

そのあと彼らが何を話し合ったか知らない。そのうち、夜の明ける前に挨拶して出て行った。ところが朝になって手に手に何か持って帰って来たのである。私は一瞬ハッとした。「どうした？」と聞く。直感的に昨夜よりきりりとした様子であった。そしたら壊れた茶碗のかけらに、口の欠けた土器から老酒を注いで「元山隊長に乾杯（イエンシャントイチャン　カンペイ）」といって皆が差し出した。私はその衝撃的な状況に感激し、むせび泣いた。焦土と化した街を、おそらく走り回って捜し求めたであろう別離の酒。お互い手にしていた茶碗に原形をとどめたものはなかった。そのときの状況を思い出すと今も涙が止まらない。現にもう彼等は戦勝国の兵士であり、私は逆に敗戦国の、いわば捕虜の身である。よし、この際、度重なる恨み辛みを晴らしてやろうと言っても無理なことではないのか。場合によっては旨く連れ出して葬ることも出来るのでは、と私は乾杯の酒を口にしながら思った。そう思うとさらに胸がこみあげた。彼たちは知っていた。日本が大変なことを。米を持って帰れとも言ってくれた。湖南は米の多い所だからである。なんという優しい人間愛、友情であろうか。私は忘れない。

今、彼たちはどうしているのだろうか。悔やまれるのはあの日、弁慶たちの住所氏名を聞いていなかったことである。